

上野動物園における「猛獣処分」とその慰霊

齊藤涼子（大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター）

はじめに

（１）本稿の課題

本稿は、東京上野動物園が1943年の夏におこなった「猛獣処分」とその「慰霊祭」を検討することで、総動員体制の確立における「猛獣処分」の実態とその意味を考えるものである。アジア・太平洋戦争末期に各地の動物園で動物が処分されたことは『かわいそうなぞう』をはじめとした児童文学でよく取りあげられており、戦後日本の「反戦・平和」の教訓となってきた。いっぽうで、「猛獣処分」がどのような経緯で実行され、また、その後の「慰霊祭」がどのように催されたのかという実態は広く取りあげられているとはいいがたい。特に「慰霊祭」については開かれたことさえあまり知られていないが、動物を自ら殺していながら慰霊をおこなうという矛盾はどのように正当化されたのかという点は重要であろう。

「猛獣処分」の前史として、筆者はすでに日中戦争以降の上野動物園を題材にして、動物園が「戦時のやすらぎの場」ではなく、「軍用動物慰霊祭」を開いたり、「戦功動物」や「戦利品動物」を展示したりすることで、戦意高揚の場となっていたことを明らかにした（拙稿「総動員体制の中の上野動物園」）。そこで、動物園という娯楽施設は、総動員体制の確立過程において、映画や音楽などと同様に戦争遂行という目的にそって変容し、精神動員に役果たした点を指摘した。

一般に「猛獣処分」は「やむなく起きた戦争の悲劇」として知られているが、動物園も総動員体制の渦中にあったことを考えれば、「猛獣処分」もまた、ただの悲劇ではなく、戦争遂行を第一とする国家目的にしたがって起きたとみる

のが至当であろう。すでに、これまでに複数の論者から、動物殺しは広くいわれている「空襲の激化」に起因したものではなかったことが示唆されており、動物を殺すことが人々の戦意高揚に利用できると期待されたのではないかと指摘されている。本稿はこの指摘に着目しつつ、「猛獣処分」とその「慰霊祭」の実態を検討する。

（２）先行研究について

上野動物園の「猛獣処分」を題材にした論考には、長谷川潮（初出1981）、山崎元（1990）がある。長谷川は児童文学論評の立場から、『かわいそうなぞう』が東京の空襲が激化したためやむなく処分したという構成をとっていることを批判し、事実として空襲が本格化する前に殺されたことが重要だとしている。長谷川は動物殺しの隠された意図として、軍や政府の当局者には、日本軍優勢を報じつつも、実際はB29の量産化を目前にして民間の防空対策を急速に盛り上げる必要があったのだとし、人々に戦争の実情を知らせることなく、空襲を意識させようとしたのが猛獣を虐殺した真相であったとした。

山崎は東京大空襲45周年を記念した合唱劇「ぞうれっしゃがやってきた」の論評にちなみ、各動物園で実行された「猛獣処分」を検討しており、上野動物園においては、都長官大達茂雄の命令でおこなわれたことを重要視している。山崎は、「空襲下猛獣が住民に被害をおよぼすおそれ」と、「動物の飼料が欠乏したこと」が処分理由の通説とされていることをあげつつ、他国の動物園では予防的に動物を殺した例がないことを指摘し、また処分当時に空襲が切迫していなかったことをあげ、猛獣の虐殺は娯楽を奪って国民を戦争に総動員しようとした大達の煽動であったと結論づけた。

いっぽう、動物園関係者からも同様の見解が示されており、当時上野動物園長を務めた古賀忠道は戦後になって、大達は「勝ち戦とと思っている都民に、戦時時局を自覚させるために動物を処分することで警告を発しようとした」という趣旨のことを書いている。古賀の見解は、その後、飼育課長を務めた小森厚、園長を務めた小宮輝之にも踏襲されている（小森1997、小宮2010）。

長谷川と山崎の指摘どおり、日本本土の空襲は1942年4月18日、16機のB25が東京、横浜、名古屋、神戸などを爆撃したのが最初である。それから本土空襲が本格化するのは1944年11月24日、B29が東京を爆撃してからのことであり、「猛獣処分」はこれに先立つ1943年夏に実行されている。長谷川や山崎はこの経過について、動物を予防的に殺すことには、戦意高揚や時局引き締め、より具体的には人々の防空意識への本腰がねらいであったと推測し、この見解は古賀など動物園関係者とも一致している。しかしながら、以上の指摘は史料の少なさからいまだに推測の域を出ない。本稿では、これらの指摘を念頭におきつつ、「猛獣処分」がどのような経過をたどったのか、殺された動物の慰霊祭がどのように開かれたのかを探ることで「猛獣処分」のもった意味を追究したい。

なお、本稿で主に使用する史料は前稿同様、福田三郎『実録上野動物園』（毎日新聞社、以下『実録』）と東京都発行の『上野動物園百年史』及びその資料編（東京都、以下『百年史』、『資料編』）である。『実録』は『全集日本動物誌4』（講談社）に採録されている版を使用した。

1. 「猛獣処分」について

（1）防空演習と「動物園非常処置要綱」

先述のとおり、戦後、各方面から動物園の「猛獣処分」理由とされた空襲の危険は建前であったと指摘された。しかしながら、空襲が意識されなかったことはなく、上野動物園では空襲を想定した訓練がおこなわれていた。

『実録』で最初に「防空演習」の語が表れるのは1938年9月である。これによれば、防空演習は9月12日から16日までの5日間おこなわれ、12日には園内に避難所を設置して来園者の安全を

確保するようにし、13日には訓練空襲警報が発令され、猛獣やクマなどの動物を寝室に入れる予定をした。また翌14日には職員の非常召集の演習があり、16日には警報に備えた夜間居残りをして空襲に備える訓練は終了したとある。『実録』には、これ以降断続的に防空演習の記述があるが、いずれも訓練は空襲時における来園者の誘導と脱出した動物の確保であった。

これに「動物の処分」が追加されたのが1941年8月初旬、東部軍司令部に「動物園非常処置要綱」（以下、「要綱」）を提出してからである。『百年史』によれば、7月29日に園長の古賀が召集され、8月1日に福田が園長代理に就くとすぐ、陸軍東部軍司令部獣医部から非常時における動物園の対策について文書を求められた。これに応じて作成されたのが、「要綱」である。

「要綱」では危急の度合いを3段階に分け、また動物の危険度を4種に分類して、それぞれ対応を定めていた。『百年史』によれば、以下のようである。第1期である「防空下令アリタルトキ」には「直チニ第1・第2種危険動物ノ処置準備」をし、第2期の「空襲アリタルトキ」には「第1種・第2種動物処置ノ準備ヲ完了、待機ノ態勢ヲ執り、第3種動物ニ対シテモ処置ノ準備」をし、さらに第3期の「空襲ニ依ル爆撃火災ノ危険近接シタルトキ」には「危険ノ規模、近接ノ程度ニ応ジ第1・第2種ヲ順次処置シ、更ニ危険ノ及ブトキハ第3種動物ヲモ順次処置ス」となっている。また猛獣等の処置については「薬物ヲ原則」とし、動物別の薬物（硝酸ストリキニーネ、青酸カリ）の致死量について表がつけられた。

動物の危険度については、『実録』に詳細が記されているが、「第1種（最も危険なるもの）」には、ヒグマ、ホッキョクグマをはじめとした大型クマ、トラ、ヒョウ、クロヒョウ、コヨーテ、シマハイエナ、チーター、ライオン、満洲オオカミ、カバ、アメリカ野牛、ゾウ、クロザル、ガクオサル、マントヒヒ、ガラガラヘビ、ニシキヘビがあげられた。さらに、「第2種（比較的危険少ないもの）」、「第3種（一般家畜類）」、「第4種（その他）」に分けられた。また、この処置の計画要旨には以下のようにある。

「〔動物園の危険防止には、引用者〕充分ナル防護施設ヲ為シ居ルモ空襲下ニ在リテハ本

計画ニ依リ非常措置ヲナスモノトス現在動物ハ多年多額ノ経費ト努力トヲ以テ蒐集保存シ来リタルモノニシテ後日ノ入手モ極メテ容易ナラザルモノ多キヲ以テ軽率ニ之レヲ処置スベキモノニ非ザルヲ以テ充分ナル防護準備ノ上飼育維持シ已ムヲ得ザルニ至リテ処置スルモノトス」
 (『資料編』729頁)

以上を見ると、動物の処分は空襲が起き、さらに爆撃や火災の危険が近くに迫った場合にかぎって実施されるように計画されており、また計画要旨にも「充分ナル防護準備ノ上飼育維持シ已ムヲ得ザルニ至リテ処置スルモノトス」と記されているため、動物園では、動物処分を念頭にしつつも慎重な姿勢を表していたことがわかる。

他方、動物の処分計画が明文化されて以降の動物園では「危険な動物」の処分をどのようにおこなうのかという課題も具体化された。以下は『実録』によるが、「要綱」提出後、福田らは空襲時に軍の応援を求めるため、上野憲兵分遣隊長のもとを訪れ、動物園の非常時には兵の応援と動物の銃殺をあわせて依頼している。その後、申し入れの承諾があり、分遣隊長は来園して動物舎の運動場や寝室を視察し、動物の習性などもよく聞いて帰ったという。警察との連絡も取られ、10月には警察署から連絡があり、動物園になにか異変が生じた場合は直ちに伝令を出すこと、警察の方から連絡する場合は交番から連絡するという取り決めもできている。

これに加えて、動物園内の防護体制も整備されていくようになる。さらに『実録』を読みたい。「要綱」提出にともなって、防空訓練の知識のため、職員は常に「時局防空必携東京市区特設防護団訓練実施資料」を所持するようになり、防空に関する講演を聞きに行ったりもしている。1942年に入ると、動物園でも特設防護団が組織され、園長が団長を務め、防護団は職員50名ほどで警備班、防護班、消化班、工作班、救護班を構成し、動物脱出の場合は捕獲班が編制される仕組みをとっている。

1942年4月18日に、日本本土は初の空襲を受けたが、動物園もこれ以降より緊迫していく。『実録』によれば以下のようなのである。福田は5月1日

には上野憲兵分遣隊長をふたたび訪ね、空襲時に動物の脱出が起きた場合、直ちに兵を出すという承諾を得ている。初空襲後、警報は度々発令されたが、1943年に入ると、防空演習は「夜に昼に、朝に相次いで、私たちを追い立てるように」実施されるようになった。それでは、このときの演習はどのようなものであったのだろうか。以下、福田の記述をみてみたい。

今しも、防空演習が行われている。動物園内の拡声機から、敵の飛行機が来て、動物園から余り遠くないところに爆弾を投下したと、入場者に知らせた。入場者は、動物園の警備班の人によって、それぞれ樹陰とか、建物の陰に誘導された。防護団によって、猛獣たちは檻に入れられてしまい、運動場には一匹もいない。[……] 本部である事務所では、園長が動物に与える毒薬を防護班の者に渡して、猛獣の処置を命じている。防護班の各々は、毒物をかねて用意してある動物の餌の中にまぜて、急いで動物舎の方に走っていく。

(『実録』95頁)

この記述から、防空演習はかつてのように動物捕獲を目的としたものではなく、動物を抹殺するかたちに変容したことがわかる。このように、空襲が身近に迫るにつれて動物園の防空対策は変容したが、いずれにおいても、動物を処分するのは実際に空襲されているときに限っており、予防的な処分は計画されていなかった。この方策が転換させられたのが、1943年7月1日に東京都政が施行され、初代長官として大達茂雄が着任してからであった。

(2)「猛獣処分」の経過

先述のとおり、動物園では空襲の際に動物を処分するよう準備されていたが、「猛獣処分」の命が下ったのは突然であった。それも、かねてから空襲時の銃殺を依頼していた軍からではなく、東京都長官からであった。『百年史』では、福田の日記から以下の一文を拾っている。

昭和十八年(1943年)八月十六日(月)曇
 一、課長ヨリ電話ニテ即刻古賀氏ト来リヨウ

電話ガアリ古賀氏ト余ト課長室デ会フ、課長ハ長官ノ命ニ由リ、象、猛獸類ヲ射殺セヨトノコトナリ。(毒殺)
 (『百年史』170頁)

また福田は、『実録』においてもこのときのことを以下のように記している。

8月16日は、私にとって忘れることの出来ない日となった。昼前、公園課長から直ぐ来るようにと電話で呼び出された。猛獸処置の件にちがいないと直感した。私は、殺さねばならない動物の一覧表を書きあげて持っていった。課長室には、同じく呼び出された古賀さんが、陸軍獣医学校から来ていた。私の予想は的中した。しかも、1カ月以内に、毒殺せよということだった。銃殺は、音がするため、世間の人々を不安にさせるから禁じられた。課長は、「戦局が悪化したわけではないが、万一にそなえて…」と説明した。
 (『実録』96頁)

都長官大達は予防的な措置として、突然かつ短期間の処分を命じ、また、世間にさとられないための殺害方法まで指示したことがわかる。大達茂雄は内務省出身、福井県知事、満洲国総務庁長官、中華民国臨時政府法政顧問、内務次官、昭南市長などを経て、東京都政施行に初代長官として就任した人物である。

動物園では翌17日から「猛獸処分」が開始された(『百年史』)。処分が終了したのは9月23日、ゾウのトンキーが餓死したのが最後であったが、それまでに、ヒグマやホッキョクグマなどの大型クマ、ライオン、ヒョウ、トラ、チーター、クロヒョウ、ガラガラヘビ、ニシキヘビ、アメリカヤギウなど27頭が殺された(『実録』)。さらに重要なこととして、これら処分動物の一覧は、都に「毒殺」と提出されたが、実際には「多くは容易に死にきれなかったため」他の手段で殺害されていたことがある。このときに園長代理として処分を指揮した福田は『実録』において、「このことは、あまりにむごいことでもあるので今日まで、実は発表しなかったのだが、この本に、初めて明らかにする」として、絞殺、刺殺、頭部切断をおこなったことを

告白した。また、薬殺されたものでも、致死量に至らなかったため1時間以上も苦しんだ場合があったことも打ち明けられた。

他方で、銃殺が音をともなうため静かな毒殺が指示されたように、動物の処分過程が隠蔽されていたことも重要である。『実録』によれば、「世間の人の目をさけるためにも」動物の処分は閉園後に実施され、動物の死骸は翌朝の開園前に陸軍獣医学校へ運ばれ、解剖に回された。しかしながら、『百年史』によれば、「上野動物園で何やら起こっているらしい」という噂が広まったらしく、8月24日に福田は警視庁保安部保安課から動物処分の模様を聞かれている。これを受けてか、8月28日頃には園内の案内所と猛獸舎に「工事中ニ付、猛獸ハ当分見ラレマセン」という掲示がだされた(『百年史』)。以上のように、「猛獸処分」は殺害から死骸の処分まで人目が欺かれ、処分後も事実と異なる報告がなされ、すべてが動物園内に秘匿されていたのである。

(3) 動物移送の頓挫

それでは、動物の処分は、空襲の予防措置として不可避のものであり、しかも早急な実施が必要なものだったのであろうか。戦後に飼育課長を経験した小森は著書のなかで、東京都計画局公園緑地課長の井下清と福田、古賀の3名が地方の動物園にゾウなどを移送する助命工作を試み、大達に一蹴されたことを記しているが、この一件は、山崎や古賀が自身の論述のなかで、大達があくまで動物の「処分」に執着した証左としてあげているものでもある。ここでは、大達の「猛獸処分」命令がいかなるものだったのかを動物移送の一件から検討してみたい。

『百年史』によれば、大達から「猛獸処分」の命が下ってすぐ、井下、福田、古賀の3名は動物移送を検討したようである。福田の日記によれば、「八月十七日(水)一、今朝課長ヨリ電話ニテ名古屋、仙台行ハ中止シ、手紙ヲ出セトノコトナリ。一、名古屋ト仙台へ課長原稿ノ手紙ヲ出ス」とあり、動物移送に着手したのである。課長井下の手紙原案は以下のように書かれている。

[前半略] 敵反抗に対する万全の対策を講

ずる必要を生じ当地の如きは先づ第一目標となり得ることは想像される結果動物園としては、都心部に在ること故、猛獣の疎開をすること、相決し候。当方に比し安全なる貴園に於て収容の御希望有之候へば避難保管の名を以て御引渡し致し度 [……]

(『百年史』172頁)

これに対し、名古屋からクロヒョウ、仙台からはゾウの他ヒョウのオスも必要であるとの回答を受け、結果、8月23日に仙台動物園から事務長代理の石井是順が来訪、ゾウの移送が具体化した(『百年史』)。同日、田端駅に赴き、「ゾウ運搬費130円、貨車内修理大工2人、材料五寸角四本で費用50円、付添1人の旅費3円」でまとまり、夕刻出発で翌日正午までに仙台着の手続きを整えた(『百年史』)。しかし、この計画は大達の拒否で実現しなかった。福田の日記には以下のように記されている。

八月二十三日(日)晴

一、仙台動物園ノ石井氏来園、象ノ件ニ付話ス、共ニ田端駅貨物掛、上野警察署ニ赴ク、[後半略]

一、課長ト面談、仙台へ象運搬ノコトヲ話ス。

一、課長ヨリ電話ニテ都長官ハ中止セヨトノコトナリ、都ノ責任問題ト言ハルト。

(『百年史』172頁)

ゾウの他にも、高松市の栗林公園動物園に仔ヒョウを引き渡す計画や、満洲の新京(長春)動物園が爬虫類を預かる申し出もあったが、すべて実現していない(『百年史』)。このような「全頭処分」に固執した命令がどのように発案されたのか詳細はわからないが、唯一、戦後になって古賀が以下のように述べている。

これは後に聞いたことでしたが、その頃はまだ国民は、みんな戦争には勝っていると思っていたのです。しかし都長官になる前に、シンガポール、つまり昭南市長をやっていた大達さんには、もうほんとうの戦況がわかっていたのでしょう。[……]そして大達さんは、それを言葉で言い表すのではなく、動物園の猛獣を処分することにより、国民に警告

を発するという方法を取ったのでした。それだから、草食獣であるゾウなどは、田舎に疎開させたら菜や草で生きられるのだからという意見もあったようですが、動物を処分するのが目的ではなかった大達さんは頑としてそれを許さなかったとのことでした。

(『百年史』170-171頁)

1942年2月にシンガポールが日本軍に占領された後、古賀は3月9日から4月中旬にかけて第1回の赴任、6月末から11月23日にかけて第2回の赴任をして大達の昭南市政を経験しているが(『百年史』)、古賀がシンガポールの実状を見て上のような言葉を残したことは、相当程度の説得力があるといえよう。

また、小森は自身が出版委員を務めた『百年史』について取材を受けた際、「戦争切迫にそなえ全国に範を垂れるとして、[動物の処分を、引用者]やったわけです」(『赤旗』1981年3月9日)と答えていることも着目される。

大達茂雄は戦後、1952年4月に公職追放解除されると吉田内閣で文相を務め、教材や教育内容に国家統制の強化をはかり、「政治的中立確保法」と「教特法改正」を成立させた国家主義者であった。大達がゾウを仙台に送ることを「都の責任問題」といい、威信に関わるとみなしたということも十分に考えられるのである。

2. 「時局捨身動物」慰霊祭について

「猛獣処分」は隠蔽のうちに実行されたが、対照的に処分動物の「慰霊祭」は積極的に宣伝された。ここでは、各社の新聞記事から「慰霊祭」の様子を取りあげることで、「猛獣処分」が事後どのように扱われたのかを検討したい。

はじめに新聞に表れたのは、1943年9月3日、動物園の動物を空襲に備えて「処置」したというニュースである。見出しを拾うと、「上野動物園の猛獣／空襲に備へて処置／あす懇ろに供養、死骸は剥製」(『朝日新聞』朝刊)、「いざに備へて『処置』／あす上野動物園で猛獣の供養」(『毎日新聞』朝刊)、「上野動物園も警戒管制／虎などの猛獣を処分」(『東京新聞』朝刊)がある。各紙とも空襲に備えて凶暴化する危険の高い猛獣を処分したこと、翌4日に猛獣の慰霊祭がおこ

なわれることを報じている。9月4日には上野動物園で慰霊祭が開かれ、翌5日には各紙でこの様子が報じられた。以下、見出しをあげると、「蟬の伴奏で獣魂の“防空法要”」（『朝日新聞』朝刊）、「“時局捨身”の猛獣／盛大に可憐な霊を慰む」（『読売新聞』朝刊）、「全猛獣帰らぬ旅へ／獅子も虎も愛し子、園長代理の感慨」「戒名は『時局捨身動物』／けふ関係者が集って慰霊祭」（『毎日新聞』朝刊）、「動物園の慰霊祭」（『東京新聞』夕刊）がある。

このなかから慰霊祭の様子を見てみると、『朝日新聞』には、浅草寺の大僧正が導師となり法要が営まれ、参列者は「大達都長官、松村都次長をはじめ谷川防衛、山本計画両局長、関係職員らおよび同園隣組の忍岡国民校、竹の台高女、東洋家政、谷中清水町青少年団の生徒児童ら約400名」であり、「式場正面には“殉難猛獣霊位”と記された位牌、その前に生前好物だった肉、魚、野菜などの供物、両側には日本動物園水族館協会会長鷹司信輔公と都長官からとの花環が飾られてゐる」とあるので壮観な様子がわかる。『読売新聞』によると、式は散華、追弔文、普門品、後吹きのものち、都長官はじめ参列生徒の焼香がおこなわれたという。

このように慰霊祭は大きく催され、動物は「時局捨身動物」と呼ばれた。それでは、「時局

（小森厚『もう一つの上野動物園史』丸善ライブラリー、60頁）



「慰霊法要」に向かう人の列、鯨幕の裏にはまだ象が生きていた。

捨身動物」はどのように描かれ、意味づけられたのであろうか。さらに新聞記事を見てみたい。記事には「日ごろお馴染みのライオンや虎のお葬式があるときいて付近の子供たちが続々つめかけ小さな手に香華のけむりは長々と絶えなかった」（『読売新聞』）といった哀しみを誘うもののほか、「時局捨身」の名称どおり、戦争のために「殉死」したというレトリックも使われた。『毎日新聞』では以下のように報じられている。

いざに備へて上野動物園では飼育する動物のうちライオン以下の猛獣を処置したがこれら動物の霊を供養するため慰霊法要が四日午後二時から同園内で行はれた、都民に親しまれてゐたこれらの猛獣まで処分しなければならなくなつた決戦の波が今都民の胸に強き決意をわきた、せる、

（「全猛獣帰らぬ旅へ／獅子も虎も愛し子、園長代理の感慨」『毎日新聞』1943年9月5日）

動物が「決戦」のために死んだという欺瞞は、同記事の福田のインタビューにも表れている。福田は、「ほんたうに可愛い奴等でした。空襲は必至だといふことを無言のうちに国民に知らせて死んで行つたのです」と答え（答えさせられ）ており、殺された動物は「決戦下の殉難」であるかのように描かれたのである。

「猛獣処分」には、このような「殉死」イメージに加えて、「国民の引き締め」という役割も与えられた。『読売新聞』では、慰霊祭を閉じた公園緑地課長井下の挨拶として、「このような非常措置をとらざるを得なかつた時局の苛烈さをよく考へていただきたい」という、哀悼辞にはふさわしくない言葉を載せている。ここから、慰霊のかたちを借りて「時局の苛烈さ」を強調したところに

「猛獣処分」の意味づけをみることができよう。

また動物の処分は、「少国民」の宣伝にも利用された。慰霊祭の挙行を伝えた記事には、次のような一文が見られる。

虎も獅子も、もろもろの猛獣一蓮托生、み仏の袖の下、極楽浄土の本願をする、あの世で永年お世話になった坊ちゃん、嬢ちゃんのため、健気にこの決戦を戦い抜かうとする少国民のために健やかな成長を祈るのであらう、（「戒名は『時局捨身動物』／けふ関係者が集って慰霊祭」『毎日新聞』1943年9月5日）

この記事に呼応するかのように、『朝日新聞』の10月5日（夕刊）には、動物園に寄せられた手紙のなかから「キツタシゲル君」の便りを紹介している。

どうぶつえんのけだものがしんでかはいさう、[……] もう、もうじゆうはあないんださびしくつてたまらない、ぼくが大きくなつたらね、アメリカ、イギリスをぶつつぶす、ライオンたちのかたきを、きつととつてあげませう
（「象さん、仇はとつてやる」／命捧げた猛獣にヨイコの決意」『朝日新聞』1943年10月5日）

記事のなかで、この便りは「死を哀しむ感傷に終始せず、健気な誓いが綴られている」と顕彰され、動物の仇討ちをしようとする「少国民」の姿が宣伝されたが、さらに『実録』によれば、上野動物園には以下のような手紙も届いたという。

〔前半略〕戦いのためとは言いながら本当にかわいそうです。そしてこれらの動物達を殺させた米、英を討たねばなりません。軍人を志望している僕です。戦場でこの殉国動物の仇討ちをしてやりたいと思います。そうすれば、僕を喜ばしてくれた動物も喜んでくれると思います。
（『実録』102頁）

「猛獣処分」と慰霊祭は、「米英から動物を死なせた仇をとる」と憤慨する「少国民」の創出

と宣伝に役割を果たしたこともあったのである。

以上に見てきたように、慰霊祭において、動物の処分は「時局捨身動物」という名称のとおり、「非常時局による殉死」として正当化され、また「防空法要」（『朝日新聞』）という文言のとおり、空襲必至の時局認識に利用された。加えて、「仇討ちに燃える少国民」がつくられ、描かれることで美談化されたといえる。すなわち、「殉死」イメージの宣伝によって、殺した動物を悼むという逆転を正当化しつつ、追悼が戦争遂行を支える方向へ回収され、美化されたのが「時局捨身動物」慰霊祭のもった意味であった。

補足すれば、ゾウ2頭は慰霊祭の間も生きながらえており、福田は井下にゾウが2頭残っていることは内証にしろといわれ、鯨幕の後ろに隠された（『実録』）。小森の著述によれば、ゾウの死亡が遅れていて、この処分が発表より先に世間に漏れるのを嫌った東京都がゾウの死を待たずして慰霊祭の挙行に踏みきったとされている。総動員体制下では事実の隠蔽と情報の統制が徹底されたが、それは動物園においても例外ではなかったことを示してもいよう。

おわりに

本稿で明らかにしたことは以下の4点である。まず、「猛獣処分」の前提として、動物園における空襲時の対処は、来園者の避難と脱走動物の確保であり、動物処分の計画はなかったこと、その後、動物の薬殺を定めた「要綱」においても、処分は最終手段とされていたことである。次に、「猛獣処分」は都長官大達の命であり、一匹の避難すら許さない「全頭処分」という異常なものであったことである。大達にとって動物を殺すことは防空対策そのものというより、「都の責任問題」であり、威信に関わるものとみなしていたことも重要である。その次に、慰霊祭において処分動物は「時局捨身動物」と呼ばれ、戦争遂行のために命を捧げたとして顕彰されたことである。また、公園緑地課長井下の「時局の苛烈さをよく考へていただきたい」という挨拶にあるように、慰霊祭の挙行は人々に対する戦争への意識づけと一体の関係にあった。このような「犠牲の顕彰」と「銃後の引き締め」のもとに異常な処分が正当化された点は強

調しておきたい。最後に、動物園に届いた子どもの手紙からは、「猛獣処分」は米英が引き起こしたことであるという歪んだ認識をみることができ、「仇討ち」を期す「少国民」の美談になったことも明らかになった。しかしながら、大量の動物殺しを引き起こした大達茂雄について人物像に迫ることができなかったのは本稿の課題として残った。

今後の展望としては、「猛獣処分」が慰霊祭において「殉死」と宣伝されたいっぽうで、軍馬、軍犬の死が「戦死」として扱われた近似性に着目したい。軍馬、軍犬の慰霊と顕彰の様式について考察した森田敏彦によれば、アジア・太平洋戦争期において軍馬、軍犬は兵士同様「出征」し、「武勲」をあげ、戦場で命を落とすと「散華」したと慰霊され、美談化された（森田2011, 2014）。上野動物園では日中戦争以降、軍用動物の「慰霊法要」が盛大にあげられてきたが（筆者前稿）、「猛獣処分」においても同様の様式がとられたことは着目される。この慰霊様式の近似は、軍用動物が「戦場で奉公」し、その他の動物が「銃後で奉公」という戦時社会のイデオロギーを投影しているようだが、これは、総動員体制において動物が全体としてどのように扱われたのかという問題であるので、より一層調査したい。

引用・参考文献

- 福田三郎『実録上野動物園』『全集日本動物誌4』今西錦司・戸川幸夫・中西悟堂監修、講談社。
 東京都『上野動物園100年史』及び資料編。
 斉藤涼子「総動員体制のなかの上野動物園」『アジア太平洋研究センター年報』第14号、2017年3月。
 長谷川潮「どうも、かわいそう—猛獣虐殺神話批判」『戦争児童文学は真実をつたえてきたか』梨の木舎。
 山崎元「象はなぜ殺されたか」『文化評論』352、1990年6月。
 小森厚『もう一つの上野動物園史』丸善ライブラリー。
 小宮輝之『物語 上野動物園の歴史』中公新書。
 吉田裕『アジア・太平洋戦争』岩波新書。
 柳河瀬精『告発 戦後の特高官僚』日本機関紙出版センター。
 森田敏彦『戦争に征った馬たち』清風堂書店。
 同「軍犬からみた日本の戦争」（上）（中）（下）『歴史地理教育』820、821、823、2014年6月、7月、8月。